

## F-45 悪性胸水中のTCR- $\gamma$ $\delta$ 陽性T細胞の増加

共立菊川総合病院外科<sup>1</sup>、内科<sup>2</sup>、浜松医科大学第2内科<sup>3</sup>  
○高橋 毅<sup>1</sup>、吉富 淳<sup>2</sup>、佐藤篤彦<sup>3</sup>、早川啓史<sup>3</sup>、  
千田金吾<sup>3</sup>

【目的】 癌性胸膜炎の胸水局所の免疫を研究する目的で胸水と末梢血のT細胞マーカー、補体値等を検討した。

【対象と方法】 対象は癌性胸膜炎16例（男性9例、女性7例、年齢42～99歳、平均年齢73.1歳）であり、原発性肺癌11例、転移性肺癌5例であった。感染性疾患等による胸水貯留症例12例（男性10例、女性2例、年齢46～95歳、平均年齢71.1）を対照群とした。胸水の一般検査に加え、細胞分画、CEA、ADA、C3、C4、CH50、T細胞マーカー（CD3、CD4、CD8、TCR- $\alpha$   $\beta$ 、TCR- $\gamma$   $\delta$ ）などを検討項目とした。

【結果】 悪性胸水のCD4分画（ $46.0 \pm 16.6\%$ ）、TCR- $\gamma$   $\delta$ 分画（ $18.4 \pm 6.3\%$ ）は末梢血（各 $30.1 \pm 11.8\%$ 、 $3.0 \pm 2.1\%$ ）に比較して有意に増加していた。また、悪性胸水のTCR- $\gamma$   $\delta$ 分画に関しては、対照群の胸水（ $6.3 \pm 5.2\%$ ）に比較しても有意に増加していた。また、悪性胸水のCH50は15例中3例が12未満であり、末梢血に比較して有意に低下していた。

【考察】 癌性胸膜炎において胸水と末梢血のT細胞の分布に差があることが示された。癌性胸水の局所免疫においてCD4陽性T細胞、TCR- $\gamma$   $\delta$ 陽性T細胞が関与している可能性がある。

## F-47 原発性肺癌における可溶性E-セレクトイン測定 の有用性について

自治医科大学呼吸器内科

○坂東政司、石井芳樹、押川克久、菅間康夫、  
北村 諭

【目的】 E-セレクトインは血管内皮細胞上に一過性に発現される接着分子で、一部の癌細胞表面の糖鎖（SLX、CA19-9）のリガンドとして血行性転移に関与している可能性がある。今回、原発性肺癌症例での可溶性E-セレクトインを測定し、その臨床的意義について検討した。

【対象と方法】 1996年4月から1997年3月までに当科に入院した原発性肺癌症例のうち、可溶性E-セレクトインが測定可能であった45例（腺癌23例、扁平上皮癌10例、小細胞癌12例）を対象とし、臨床病期（遠隔転移の有無）、組織型との関係について検討した。

【結果】 転移を有するIV期肺癌20例の可溶性E-セレクトインは $58.6 \pm 19.0$  ng/mlで、健常者20例（ $46.3 \pm 17.2$  ng/ml）と比べ上昇していた。組織型別では、対側肺や脳転移を認める腺癌5例で $74.4 \pm 3.4$  ng/mlと高値を示したが、骨転移のみの腺癌5例では $50.6 \pm 12.7$  ng/mlであった。扁平上皮癌や小細胞癌では病期との相関を認めず、閉塞性肺炎を併発した5例でのみ75 ng/ml以上の高値を示した。

【考察】 可溶性E-セレクトインは、腺癌症例にて病期の進行とともに上昇したことより、癌の転移にも関与している可能性が示唆されたが、閉塞性肺炎などの既存肺組織の炎症により影響をうけるものと考えられた。

## F-46 非小細胞肺癌におけるテロメラーゼ活性と 遺伝子異常の解析

産業医科大学第2外科

○多賀 聡、大崎敏弘、榮福亮三、宗 知子、  
今林 悟、井上政昭、井本秀幸、大神 明、  
竹之山光広、花桐武志、吉野一郎、中西良一、  
市吉裕二、安元公正

【目的】 非小細胞肺癌におけるテロメラーゼ活性の有無を測定し、多重遺伝子変化との関連を検討した。

【対象・方法】 非小細胞肺癌切除48例を対象とした。テロメラーゼ活性はTRAP(Telomeric Repeat Amplification Protocol)法で測定した。遺伝子異常は、p53 (PCR/SSCP、免疫組織染色IHC)、K-rasコドン12 (designed RFLP)、Rb (IHC)、p16 (IHC)、3p(microsatellite markerによるLOH)を解析した。

【結果】 テロメラーゼ活性は非小細胞肺癌の83.3%に検出され、正常肺組織では検出されなかった。テロメラーゼ活性の有無と年齢、性別、組織型、T,N因子、stageとの関連は認めなかった。p53、K-ras、Rb、p16遺伝子の異常はそれぞれ67%、4%、23%、15%、3pのLOHは39%に認めた。これらの異常を3個以上もつものでは全例テロメラーゼ活性が検出された。テロメラーゼ活性陽性例は陰性例に比べ有為に予後不良であった。

【結論】 テロメラーゼ活性は、遺伝子異常の蓄積のあるものに高頻度に認められ、予後を反映していた。

## F-48 福島県いわき市における中学および高校生の 喫煙状況

いわき市医師会肺癌対策委員会

○池田 道昭、酒井 陸雄

【目的】 肺癌予防の一環として、中学および高校生の喫煙について調査した。【対象】 中学4校、835人（男431人、女404人）、高校5校、1,874人（男673人、女1,156人、不明45人）の合計2,709人を対象とした。

【結果】 【中学生】 「喫煙経験あり」は、男が25.5%（110/431人）、女は8.7%（35/404人）で、「現在も吸っている」は、男は1.6%（7/431人）、女は0%であった。喫煙動機は「興味から」が48.9%（71/145人）、「友達の影響」が17.9%（26/145人）であった。喫煙の害については19.5%（64/328人）が知らなかった。【高校生】 「喫煙経験あり」は、男は44.2%（298/673人）、女は14.0%（162/1,156人）で、「現在も吸っている」は、男は28.3%（191/673人）、女5.9%（68/1,156人）であった。喫煙動機は、「好奇心」が43.8%（211/481人）、「友達の影響」が37.8%（182/481人）であった。入手先は自販機が71.4%（198/277人）であった。喫煙の害について、「現在も喫煙している」生徒のうち64.5%（175/271人）が「気にする」と答えた。喫煙時の「うしろめたさ」は57.9%（157/271人）が「何も感じない」と答えた。女生徒の常習喫煙率は、男女共学高では8.3%（60/723人）と、女子高の1.8%（8/433人）より高かった。

【結論】 中学男の1.6%、高校男の28.3%は既に常習喫煙者であった。青少年に対して喫煙の有害性をさらに啓蒙し、喫煙しにくい環境を整える必要がある。